

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです
「損な役回り」を買って出る人 敗軍の“しんがり”は、実力者にしか務まらない
企業には「トラブルシューター」と呼ばれる人がいます。

日本語に訳せば「紛争の調停人」となるでしょうか。

彼らは、どこかの部門がトラブルを起こすと、解決のために乗り出していくわけです。ある意味、とても格好いい立場で、たとえば子会社の一つで売上げが伸びないとか、とうとう赤字に転落したとか、ときには不正が発覚したとなったときに、トラブルシューターが現場に送り込まれていきます。

つまり、トラブルシューターとは、トラブル解決を任せられるくらい実力があり、信用がある人なのです。しかし、彼らにしてみれば、送り込まれる先はチームワークは壊れ、心のすさんだ従業員の溢れた問題だらけの場所なのですから、個人的なメリットはありません。それでも意味があるとしたら、可能性は低いけれども、うまく解決できた暁には「名誉」が手に入るというくらいのことです。もっとも失敗の可能性のほうがはるかに高いわけで、軍隊でいえば、まさに敗走し始めた軍の“しんがり”を任せられるようなものです。敗軍の“しんがり”を務めるのは、非常に難しいことだと聞いています。実力がなければ敵の攻撃を抑えることはできず、犠牲者、負傷者も当然多くなります。

もし、あなたが部隊長を務める部隊がしんがりを命じられたら、兵力の半分以上が失われることを覚悟しなければなりません。もしかしたらあなた自身も犠牲になるかもしれません。しかし、そうすることで軍全体が助かるというのであれば、誰かがやらなければいけないことです。

しかし、会社にはそういう人が必要なときがままあります。そして、仕事ができる社員は往々にしてトラブルの場に駆り出されていくものです。

たとえば、2010 年、日本航空再建のため京セラ創業者の稲盛和夫氏が 78 歳という年齢で CEO に担ぎ出されました。他に適切な人がいなかったために仕方がないということで、稲盛氏が乗り込んでいかれたのだと思います。もっと若い人材が日本にいなかったのはさびしいことですが、誰かがやらなければならないことであり、そこに飛び込んでいけるのは、ときには損な役回りでも引き受けられる強い人であるわけです。これからの若い人たちには、トラブルの解決を依頼されることをむしろ意気に感じるくらいの心の強さを身につけてほしいと思います。それなりに評価される仕事をしているからこそ、「君が頼りだ」といつてもらえるのです。

「前向きに考える」ことができるのも、実力があると認められる社員になるための一つの条件です。前向きに考えられない人はたくさんいます。ときには、自分が失敗すると、「上司が悪い」「周りの人間が悪い」「会社が悪い」と、責任を他になすりつけるような考え方をする人もいます。そんな後ろ向きの考え方では決して前には進めません。たとえ損な役回りが回ってきて、前向きにとらえることです。「誰もやりたがらないが誰かがやらなければいけない」仕事にも進んで手を挙げて取り組むことができたのであれば、あなたも仕事ができる社員の仲間入りを果たした証拠です。

トラブルシューターとはどんな人ですか？

()

あなたも仕事ができる社員の仲間入りをした証拠は何ですか？

()